北方山草（33）：119-120. March 2016

松井洋さん追悼

札幌市　吉中　弘介

私がこの会に入会したのは 1992 年で、松井さんは 1993 年でしたが、実質的なお付き合いが始まったのは、当会が須築川のカリバオウギの保護活動を開始した 1996 年のときからでした。当時会長であった高野英二さんを中心にカリバオウギを守る会を発足させ、盗掘などからの見守り中に 1999 年に須築川で大洪水が発生し、川原に生育していたカリバオウギが全滅したと思われ、河川復旧工事に際しカリバオウギが生育できる環境を実現するよう関係方面に要望しましたが、このとき松井さんにカリバオウギの現状報告書や生育地保全の要望書の取り纏めをして頂きました。当会が主体となって絶滅危惧植物の保全に動いたのは当会発足以来初めてのことでしたが、松井さんに大きな役割を担っていただきました。

高野さんが亡くなられたあと、松井さんに重責である会の代表を引き受けて頂き、運営を継続することができ、また以後の会誌の充実など会の発展に向け貢献して頂きました。会誌の編集にも深く関り、投稿原稿のチェックや助言など会誌の品質維持に努めてくれました。また、会の観察会の開催に際し、資料の作成をはじめ宿の手配・調整など献身的なお世話を頂きました。

松井さんは、会誌に綿密な考証に基づいた報文を毎号積極的に投稿し、紙面を飾りました。これは私事になりますが、私が道内の自生に疑問を抱いていたエゾセンノウについて一緒に調査・検討に協力していただき、取りまとめて会誌に共著で載せることができました。このとき中井秀樹先生にもいろいろお世話になりましたが、改めて松井さんの力量を実感しました。

お宅には何度かお邪魔することがありました

北海道大学総合博物館の企画展示「北のすみれ」展（2013 年春）の会場においての松井氏（後列中央）

が、1 部屋では収まらないほどの植物関連の書籍が整然と書架に並べられていて、これらは現役のころから厳選して蒐集してきたものばかりで圧倒されます。報文を書くときに手元の文献はもとより道内外の図書館などの資料も渉猟し、完璧を期す姿勢を貫きました。

2009 年から松井さんと私は北大の総合博物館で植物分野のボランティアをしてきました。高橋教授が管理されている植物標本庫の維持管理が主な役割で、新たな標本の作製と配架も行いますが、松井さんも自身が採集した標本を多く提供してきました。本来教授の許可がないと標本庫に入って閲覧することが出来ないのですが、ボランティアは維持管理のため日常的に標本庫に出入りして標本を扱うので、貴重な標本を見る機会もあり、松井さんの研究にも大いに貢献したことと思います。

松井さんが今年 3 月に自費出版した「北海道維管束植物目録」はこれまで出版されてきた道内の植物図鑑などで取り上げられた植物名を集大成し、最新の植物分類体系である APG Ⅲに準拠して配列したもので、道内関係者が待ち望んでいた基礎資料です。2007 年頃より目録つくりが進められてきましたが、今年 (2015 年) に入り、これまで心血を注いで編纂してきた目録の出版に漕ぎつけました。思えばこのことが松井さんの命を縮めたかも知れません。編纂に当たり私も些かお手伝いを致しましたが及びませんでした。

出版に当たり北大の高橋英樹教授が監修され序言も頂いていますが、これは先生が進めようとされている仮称「北海道植物誌」の編纂に向けてベースとなる存在となるでしょう。

病床にあっても、出版された目録に手を入れて各ページに多くの付箋が付けられている一冊をご子息から見せて頂きました。最後までより確かなものをという松井さんの気概を思うと感慨も新たになります。まさにこの目録の出版は松井さんの「白鳥の歌」となりました。

松井さん、ご苦労様でした。そして有り難うございました。

松井節を聞きながら酒を酌み交わせなくなってしまい残念です。